

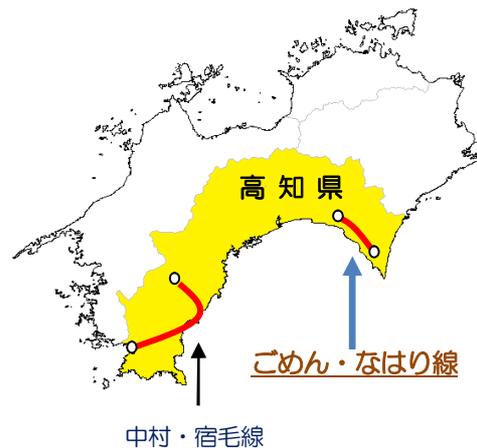
すぽっとライト

NO. 31

四国運輸局では、消費者ニーズや消費者行政上の課題を把握し、その結果を行政に役立てていくことを目的として公共交通機関の利用者等を対象にインタビューを行っています。

日本最後のローカル新線として平成14年7月1日に開通した、土佐くろしお鉄道株式会社「ごめん・なはり線」の開通10周年を記念した「県民の夢を運ぶ ごめん・なはり線」シンポジウムが7月1日（日）に高知県安芸市において開催されました。

当日は、高知県南国市の後免駅から土佐くろしお鉄道を利用し、車内において利用客の方々に「ごめん・なはり線」についてのお話を伺いながら、会場である安芸市へと向かいました。



土佐くろしお鉄道株式会社は、高知県と沿線の市町村主導の第三セクター鉄道会社で、県西部の中村・宿毛線及び県東部の阿佐線（ごめん・なはり線）の2つの路線を有し、通勤、通学及び観光分野等を始めとして、高知県の交通東西軸を形成する重要な路線です。

このうち、「ごめん・なはり線」は昭和40年3月に日本鉄道建設公団により、安芸～田野間が国鉄新線として着工しましたが、国鉄財政が悪化する中、昭和56年には工事が一時中止となり、開通の見通しが立たない状況になっていましたが、住民の熱意、県東部市町村及び高知県等の尽力により、土佐くろしお鉄道株式会社が設立（昭和61年5月）され、工事が再開されました。

こうして平成14年7月1日、開通までに37年もの歳月を要し、「ごめん・なはり線」42.7km、全20駅は開通し、現在では年間約130万人の利用客があります。

「ごめん・なはり線」の西端駅である後免駅には、「ごめん えきお君」のキャラクターの立体モニュメントがあり、20駅すべてに



様々なキャラクターが配置されています。

これらキャラクターは「アンパンマン」の生みの親である、高知県出身の漫画家「やなせ たかし」氏のユーモア溢れるイラストで表現されています。

さて、後免駅から1両編成の車両に後部扉から乗り込むと、車両前方には電光掲示の運賃表が目に入ってきます。

ワンマン列車で各駅において整理券を取り、前方扉前の運賃箱に現金を投入するのは、まさしくバスの感覚です。

車内は通路が広く、バリアフリー対応型のトイレが設置されたり、行先表示がテロップで流れたり、清潔で誰にでも優しい空間です。



私が乗車した列車は後免駅10:36発の「しんたろう号」で、幕末の志士で陸援隊隊長の中岡慎太郎（高知県安芸郡北川村出身）から名前を付けられています。

また、三菱財閥の創業者である岩崎弥太郎（高知県安芸市出身）から名前を付けた「やたろう号」もオープンデッキ車両となっています。

大河ドラマ「龍馬伝」をご覧になって、幕末の坂本龍馬たちとの活躍に興味を持たれた方も多いと思います。

列車が出発すると、この車両にはオープンデッキが設けられていることから、多くの方がデッキから雄大な太平洋を眺められていました。

この路線の大半の区間が高架となっており、見晴らしが良く、雄大な太平洋の姿に圧倒されます。

海岸沿いを走る路線性格に合わせてオールステンレスカーとなっています。



当日は、日曜日のため子供連れの乗客も多くお話しを伺ってみました。

○子供が鉄道が大好き（子テッチャン）で、月に数度は1日乗車券（800円小児用）を購入してたくさん乗っています。乗車位置も運転手さんの隣と決めています。



○家族4人（5才、3才男児）で、休日を利用して目的地無く乗車しました。子供が鉄道が好きで、学校の夏休み、春休みには利用しています。

○高知市内に住んでおり、初めて小学生の孫と利用させてもらったが、オープンデッキから見る、太平洋の景色が素晴らしい。採算ベースでは厳しいかもしれませんが、会社には頑張っ



張って欲しいと思います。
○香南市のいち駅から高知市まで、通勤しています。高校生の時から列車を利用していますが、それ以前はバスしかなかったもので、渋滞等の時間の心配をする必要がなくなり、ゆったり過ごせます。

○今日は彼女と、のいち動物園に行きます。便数もあるので便利です。

○のいちから後免まで、普段は高校への通学に使っています。バスに比べるとスペースがあるので友達とゆったり会話することが出来ます。また、時間も正確なので、遅刻の心配もないです。

○開業当初から安芸駅の便所掃除、自転車の整理等のボランティアをしており、安芸駅の駅長さんより5～6枚の感謝状を頂いています。列車はバスに比べれば快適であるし、道路は事故等により遅れる場合もあります。



多くの方から、「ごめん・なはり線」についてのお話しをうかがっていると、11:30分に目的地の安芸駅に到着しました。

安芸駅のキャラクターのモニュメントは「あき うたこちゃん」でした。

この日のシンポジウムは市民会館で開催され、主催者である安芸市長から、国鉄再建の荒波のなか、日本最後に建設されたローカル鉄道で、年間120万～130万人を運ぶ地域に必要不可欠な鉄道で、正確で安全便利のうえに太平洋を独り占め出来る素晴らしい空間を有し、11の市町村が「ごめん・なはり線」を支援している等の挨拶がありました。

また、土佐くろしお鉄道株式会社の寺田社長からは四国循環鉄道の構想から37年を経て開業に至ったお話や、オープンデッキ列車の導入、沿線の各駅を拠点とした年10回程度のウォーキングイベントなど、今後も様々なイベントを開催し、通勤、通学等の足として安全第一に皆さんと共に歩んでいきたいとの挨拶がありました。



来賓祝辞として高知県知事より県外の観光客には是非、すばらしい景色を列車から見て頂きたいし、大河ドラマの「龍馬伝」の岩崎弥太郎、中岡慎太郎等により高知県東部地域の知名度は2～3段階上がった。

世界ジオパークに認定された、室戸市から東周りで是非、奈半利～高知へ入ってきて欲しい。

また、地元出身の「やなせたかし」先生のキャラクターをすべての駅に配置し全国的にも珍しく、観光客に喜んで頂けるものと思っております。

華のローカル鉄道として続いていく事を期待しています等の祝辞がありました。

その後、茨城県にある、ひたちなか海浜鉄道株式会社の吉田社長による「町も線路も元気になろう！市民とともに歩むローカル線」と題した基調講演、さらには和歌山県の貴志川線の存続に向けた取り組みや、経営努力等をパネルディスカッション方式で討論し、鉄道と地域の関わりや鉄道の社会的価値、楽しみ方などを考えさせて頂く機会となりました。



帰りの安芸駅からの列車は、阪神タイガース応援列車に乗車することとなりました。

黄色に黒の縦じまの阪神タイガースカラーが目をひきます。

車内には選手のポスターが展示されており、虎ファンにはたまらないものでしょう。

ちなみに安芸駅の次の駅は球場前駅で、阪神タイガースのキャンプ地として有名です。



当日は、日曜日という事もあり、観光目的で乗車されている方も多数見受けられました。

今回、初めて土佐くろしお鉄道の「ごめん・なはり線」に乗車し、オープンデッキ車両を始めとした個性豊かな列車に乗り、雄大な太平洋の景色を一望してみると、ローカル線が、観光面での素晴らしい役割を果たしていることを感じました。

この鉄道は、地域住民にとって通勤、通学、通院等の日常生活には必要不可欠な重要な公共輸送機関ですが、一方で、高知県東部地域も全国の地方と同様に、過疎化、少子高齢化といった問題を抱えています。

人口減少が進むこの地域で、通勤、通学需要の減少は今後も必至であり、利用促進策を今後とも実施していかなければならないのではないのでしょうか。

高知県東部地域の活性化や住民の足の確保のために、地域一体となった観光面や各種イベントの開催など、今後の鉄道の活用方法が大きな課題になると考えさせられた一日でした。



インタビュー実施日：平成 24 年 7 月 1 日（日）・聞き手：藤井